

国内経済情勢

概観

資金需要に目立った動意はうかがわれないが、金融機関の融資態度は積極的であり、年末金融もおおむね平穩裡に推移した。生産は抑制基調を続けている反面、出荷は官公需関係を中心にいくぶん持直し気配にある。製品在庫の水準は総じてなお高いものの、商品によっては在庫調整が進みつつある。かかる情勢を背景に、商品市況は、繊維などを除けば、徐々に底堅さを増している。しかし、企業の採算面などには、業種や個々の企業によって事情は区々であるが、残された問題も少なくない。

国際収支は、貿易収支が、輸出の季節的な伸長を主因に、大幅な黒字を示したが、資本収支が再び赤字に転じたため、総合では若干の受超にとどまった。

年末金融は総じて平穩

銀行券は、引き続き落ち着いた基調にあるものの、12月は年末の関係もあり、かなりの増発となったが、他方、財政資金は、公共事業関連の支払進捗などにもかかわらず、法人税即納率の上昇に伴う税込増などから、前年をかなり下回る散超となった。こうした状況に対処し、本行は売却手形の買戻しを行なったほか、短資業者に対する一般貸出の実施などかなり弾力的な態度で臨んだため、金融市場はさしたる波乱もなく越年した。

12月の全国銀行貸出は、6,081億円増と前年同月を4割強上回る著伸を示した。資金需要は、企業の手元潤沢化、経済活動の低調を映じて、総じ

て鎮静傾向を改めていないが、当月は恒例の年末決済関係資金などの需要月であり、とくに売上げ不振などに伴う中小企業筋の資金需要が目立った。他方、金融機関は、年末預金増強の関係もあり、かなり積極的に貸し進んだものとみられる。

なお、1月に本年度最初の国債(700億円)が発行された。

官公需関係を中心に出荷はいくぶん持直し気配

12月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、+0.6%と微増を続けた。これには電力向け大型機械の反動増も響いており、ならしてみると横ばいで、抑制基調に変わりはない。12月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、+1.1%の増加となった。これにも大型機械の増加が影響しているが、ならしてみてもいくぶん持直し気配となっている。かかる生産出荷の動向を映じて、12月の鉱工業製品在庫(季節調整済み、速報)は横ばいとなり、製品在庫率は1.2%低下した。総じてみると、在庫水準はなお高いが、財別には区々であり、生産抑制が比較的大幅であった一部の一般資本財(汎用機械)、耐久消費財(家庭用電器など)、生産財(窯業、化学、紙など)では在庫調整が進みつつある。なおその背景には、官公需(セメント、建設用鋼材など)や更新需要(トラック、軽四輪車、テレビ)などに、若干の動意が出はじめたという事情もある。

設備投資は、一般資本財の出荷動向から推して依然低調を続けているとみられるが、先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は、11月に-19.9%減少したのち、12月に+22.9%と著増し、一高一低のなかにもいくぶん持直し気配を示している。

商品市況は繊維を除き総じて底堅い動き

昨年末から年初にかけての商品市況をみると、繊維(綿糸、スフ糸)など一部の商品は、依然軟弱な地合いを改めていないが、昨秋来シリアを続けてきた鉄鋼が、年明け後反騰に転じ、またセメント、石油、木材など多くの商品も引き続きシリア高ないし強含みに推移している。これには、官公需の漸増(セメント、木材、一部鋼材など)、季節的需要の増加(灯油など)、弱電向け鉄鋼需要の立ち直り気配など、需要面の変化も多少は響いているが、基本的には、生産調整による供給抑制効果によるものとみられる。とくに、鉄鋼の反騰には、粗鋼減産をめぐる業界内の対立が一応落着し、当面減産体制の持続が見込まれるに至ったことが、かなり影響している。これに対し綿糸などでは、内需の不振、インドネシア向け輸出の停止など、需要面の事情に加え、不況カルテルの期限(3月)接近に伴い、その後における供給増加の懸念が強まっていることなどが、市況軟化の背景となっている。

12月の本行卸売物価は、繊維などの軟化にもかかわらず、その他商品の堅調、とくに海外高を映じた非鉄(銅)の引き続き異常高によって、前月比+0.4%の続騰を示した。その後も、上記鉄鋼の反騰もあり、1月上旬は前旬比+0.6%、中旬は+0.5%と続伸している。

12月の消費者物価(東京)は、家賃地代、自由料金などの上昇にもかかわらず、野菜が統落したため、前月比保合いとなった。しかし、1月は野菜、米の上昇から+1.2%と再び上昇した。

輸出の季節的伸長から、貿易収支は大幅な黒字

12月の外国為替収支をみると、経常収支は貿易外収支の赤字幅拡大にもかかわらず、貿易収支の大幅黒字(148百万ドル)から、89百万ドルの受超を示したが、他方、資本収支が再び赤字(69百万ドル)に転じたため、総合収支は21百万ドルの黒

字にとどまった。貿易収支の大幅な受超は、主として輸出の季節的増加によるものであり、季節調整後の実勢でみると、黒字幅は40百万ドルと前月に引き続き縮小しているが、これには海員ストライキの影響もいくぶんあるとみられる。資本収支の赤字転換は、長短借入金返済超過傾向を改めていないうえ、輸出増加に伴い、為替銀行の輸出手形買持ちが増加し、またユーロ・マネーが季節的に引き揚げられたことなどによるものである。

12月の輸出は前年同月比、為替で+12%、通関で+8%の増加にとどまり、また季節調整後の実勢では、前月比若干の減少(それぞれ-2%、-8%)となった。これには、海員ストライキによって若干の積残しが生じたことなども響いているが、これを勘案しても、昨秋来輸出の実勢が頭打ちぎみとなっていることは否めない。しかし、昨年半ばころから大勢横ばい裡に推移してきた輸出信用状は、米国向け鉄鋼の減少が一段落したこともあって、当月いくぶん持直しの気配を示しており、輸出の先行きには当面さしたる懸念はないとみられる。

12月の輸入は、為替で前年同月比+12%(季節調整後、前月比+1%)と引き続き増勢を示した。通関では逆に前年同月比-1%(季節調整後、前月比-6%)と減少したが、これを高水準であった前月とならしてみると、為替同様増加ぎみになっている。このように輸入は、ここ一両月やや底堅い動きを示しているが、これは、食料、石油、木材などの高水準持続に加え、原毛、葉たばこなどの一時的な入着増によるものである。その他の原燃料については、在庫減少の一巡などから、さすがに減り止まってはいるものの、目下のところ目立って増加に転ずる動きは見受けられない。先行指標である輸入信用状、輸入承認なども比較的落ち着いた動きを示している。